岡本清先生を悼む

相坂　耕作

日本鱗翅学会、日本蛾類学会また、兵庫県生物学会で活躍された岡本清先生が2000年6月17日、逝去された。私にとって姫路市立科学館(現姫路科学館・アトムの館)でお知り合いになってから昆虫学の恩師であり、そして昆虫民俗学への興味づけを、より深くしてもらった、かけがえのない人を失った悲しみは何事にもたえることができない。岡本先生が取り組まれた主としてガの研究概要等を、これを機に記しておきたい。

岡本先生は大正5年(1900)2月27日島根県で生まれ、兵庫県立加古川中学校を昭和8年3月4日卒業された。そして、昭和11年3月に東京農業大学農学部豫科を卒業。昭和14年3月東京農業大学農学部を卒業された。戦時中につき東洋拓殖㈱に勤務された。戦後になり、昭和28年5月から兵庫県立西脇高等学校へ勤務され、昭和38年4月から昭和48年3月末まで兵庫県立松陽高等学校に奉職された。同僚にハバチの研究家の故猪股教諭(後年博士号取得)がおられ、そして、自由時間が比較的とりやすい定時制に勤務され生物教諭として生徒の指導とともに生物部の顧問を引き受けられた。

この頃から、ガ類の研究に没頭され、特にメイガのなかまに焦点を絞り、その生態を研究されるようになった。研究対象としたガは兵庫県に分布するものであり、しかも自宅(高砂市)周辺に生息するものを調べあげ報文を書かれた。その間、母校の育種学研究所の近藤典生博士と親交をたかめ、ガの権威である井上寛博士、杉繁郎氏、山中浩氏、前波鉄也氏などとも知り合われ、普通種であっても未知な点について深く追求していこうとする研究姿勢であられた。

その結果、昭和38年(1963)には自宅付近にあるイノモトソウ *Pteris multifida* の葉をつづり合わせたノメイガの幼虫を飼育し、羽化させ、イノモトソウノメイガ *Herpetogramma okamotoi* という新種の発見につながったのであった。その他多くの未記録種や珍品の種を兵庫県下から飼育や採集をされた。ガの研究として取り組まれたものを挙げると、概ね 1)幼虫の飼育研究 2)成虫の研究 3)それを用いた教育実践とくに生物部のクラブ活動である。それによると、高等学校の生物部で各地や学校内で夜間採集を行い地元のガを主として採集研究したことである。その成果として、昭和42年播磨の地にシンジュキノカワガの成虫発見やその後の調査による幼虫発見など、私の脳裏にいまも残っている。そういえば、私は岡本先生をこの時点で知っていたのである。教育実践はご自分の研究の世界に閉じこもることもなく、それを教育に生かされた。例えば、昭和40年頃を境にして、高等学校学習のなかでガを主にチョウまた昆虫類を擬態や生息環境、それに民俗をいれ興味深く学生にやる気教育を実施された。校外では西脇自然同好会や神戸生物クラブなど顧問として指導に当たられたことは言うまでもない。姫路昆虫同好会においては1976年発足時に山本広一会長から案内状を送ってはいたのだが入会されず、私が世話役となった時点で無理やり？入会して戴き、指導して戴いた。

昭和の時代が終わるころになると体力の衰えからか、フィールドを中心として採集は中断され昆虫切手の世界へ取り組まれた。その成果は姫路市立科学館において昆虫切手展が開催され、先生の切手コレクション所蔵品の一部が公開された。リーフ数113、昆虫の種類386、切手枚数737という展示会であった。私も切手コレクションをしてはいたが、質量とも先生の足元にもおよばず学ぶこと多しであった。先生が姫路にこられる際にはついでにご自身の分と私の分を購入願っていたのではあったのだが。先生は昆虫の民俗学にも取り組まれ、より一層私の昆虫に対する民俗研究に力が入ったのも先生のお蔭であると思っている。先生は生前、教育者でもない私に対して、校長や教頭の管理職になってどうするんや、地位や名誉に走るより自分を磨き大成しろ。実業界の私も、常々先生の教訓としてこの言葉を忘れないでいる。岡本先生の意志がいつか実のあるものと念じつつご冥福をお祈りしたい。